

小学校教員養成課程における
授業実践に必要な英語力の養成

一次期学習指導要領を踏まえたアクティブラーニングをととして一

西 崎 有多子

愛知東邦大学

小学校教員養成課程における 授業実践に必要な英語力の養成

一次期学習指導要領を踏まえたアクティブラーニングをとおして一

西崎 有多子*

目次

1. はじめに
2. 授業実践に必要な英語力とは
3. 「小学校英語教育法」と英語力養成
4. 『Brown Bear, Brown Bear, What do you see?』からの実践的発展的学び
5. スマートフォンやタブレットの利用
6. おわりに

1. はじめに

2018・2019年度の2年間の移行措置期間を経て、2020年度からの次期学習指導要領の完全実施は目前に迫っており、小学校外国語活動ならびに小学校外国語科（英語）においては、多方面での早急な対応が求められている。現在、全国の教職課程を持つ大学を対象に、文部科学省による再課程認定審査が行われており、「小学校英語」・「小学校英語教育法（指導法）」の2科目が必修化される。本学では、教育学部開設時からいずれも選択科目として開講しているが、再課程認定後の新カリキュラムを待たずに、既に小学校免許取得を希望する学生に対して、本年度からコア・カリキュラムを前倒しする内容での必修化を行なっている。

コア・カリキュラムの内容は多岐にわたっており、英語を専門にしていない学生たちにとっては、いずれの科目も内容が大変多く、旧教材に加えて新教材との移行期における連続性への配慮の必要から、教材研究についても複雑な現状がある。そのため、求められている授業実践に必要な英語力の育成を含めた内容を2科目で学ぶために、具体的にどのような配慮や工夫が必要になるか、試案を示しながら論じたい。

2. 授業実践に必要な英語力とは

2.1 『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』（以下、ガイドブックと記載）より

文部科学省は、小学校における英語の授業（ここでは、外国語活動ならびに外国語科（英語）の両方を指す）においては、中学校や高等学校と同様、英語で授業をするように求めている。ガ

* 愛知東邦大学教育学部

イドブックの「実習編」では、指導者として必要な英語力養成のために、リスニング能力、スピーキング能力、リーディング能力、ライティング能力を向上させるための、クラスルーム・イングリッシュ、基本英会話、Small Talk（スモール・トーク）、スピーキング・トレーニング、発音トレーニング、（4技能それぞれ掲載）が掲載されている。細かく見ると、スピーキング能力向上のための資料が以下のような内容でほとんどを占めており、4技能の中では、指導者がまず身に付けるべきはスピーキング能力からと言えるだろう。

2.2 「クラスルーム・イングリッシュ」と「基本英会話」

ガイドブックでは、「1. クラスルーム・イングリッシュ」（計6ページ）で、1. 授業の始まり（例文数16、以下同様）、2. 活動の始まり（12）、3. 活動中（34）、4. カード・ゲーム（15）、5. 聞くことを中心とした活動（4）、6. 読むことを中心とした活動（4）、7. 聞くことを中心とした活動（9）、8. 活動の終わり（13）、9・10. 児童への指示（49）、11. 授業の終わり（9）、12. ほめる（10）、13. 励ます（12）の13項目に分け、計187の例文を挙げている。

同様に「2. 基本英会話」（計3.5ページ）では、1. 授業内での会話例と2. 打合せ等で用いられる会話例に分けて掲載されている。1. 授業内での会話例では、14. ALTの考えを聞く（4）、15. ALTとゲーム等の説明をする（6）、16. ALTに依頼する（7）、17. ALTに時間について知らせる（3）があり、2. 打合せ等で用いられる会話例では、18. スケジュールについて（9）、19. 場所について（2）、20. カリキュラムと授業について（24）、21. 授業の評価について（13）、22. 次時以降について（3）、23. 教材の作成等について（6）、24. 授業以外について（3）に分け、69の例文を挙げている。いずれもきめ細かな場面を想定した、必要かつ十分な会話を取り上げられている。本学の「小学校英語教育法」においても、ガイドブックを教科書の一部として積極的に使用している。

これらの中で、早速授業で使用する英語ということになると、「クラスルーム・イングリッシュ」の部分であり、優先順位が高い。「基本英会話」の打合せ等で用いられる会話例については、最初はこの原稿を見ながら練習しつつ打合せをすることも可能であることから、徐々に身に付けていけばよい内容とも言え、後回しにしてもよいだろう。

2.3 スピーキング能力向上

ガイドブックには、「指導者の重要な役割は、児童に理解可能で自然なインプットを提供することであり、そのためにも、スピーキング能力の向上が欠かせない。」と書かれている。「理解可能で自然なインプットを提供する」には、児童が理解できるレベルの、わかりやすい英語を使って、聞き取りやすい音声で話すことが求められる。以前求められていた「学習者のモデル」としての姿ではなく、わかりやすい英語で話すことができる指導者が必要とされているのである。

わかりやすい英語とは、誰もがわかるような平易な表現や単語を用い、必要に応じてパラフレーズ（言い換え）する能力も必要である。聞き取りやすい音声では、イントネーション、リズム、

発音が英語らしく平易なものであることが必要である。ネイティブスピーカーのようなスピードや発音が求められているわけではないが、ネイティブスピーカーに対しても理解できるレベルの英語が求められる。

一般的に日本人は、表現や発音に自信のない場合、人前で英語を話すことを極端に躊躇する傾向があるといわれている。そのため授業者は、英語で授業を行うにあたって、使用する英語を何度も練習して体得できているという自覚がある程度必要である。特に個々の単語の発音が不安なままでは、表現する場面でもその不安は付きまってしまうだろう。

ガイドブックには「勉強方法の例」として、「(1) 英語の音声をできるだけ正確にまねる。(2) 独り言を言ってみる。(3) 相手と会話する。」の3例が挙げられている。いずれもその通りではあるが、誰もが簡単にできることではない。十分な研修が行われることが必要であるが、残念ながら、現状ではあまり期待できる状況にない。個々のレベルの違いもあるが、最初にある程度の研修や指導を受け、それに基づいて独習し、その成果を自分で確認できる方法が必要である。大学では学生は指導法の授業内での模擬授業で、現職の先生方においてはご自分の教室での指導の際に、恐れず使ってみる、使うことに慣れていくことが必要なのは言うまでもない。実際の場面で使うことがことばの習得では何よりも肝要である。

3. 「小学校英語」「小学校英語教育法」における英語力養成

3.1 小学校英語関連科目の状況

文部科学省が示す「外国語（英語）」のコア・カリキュラムにおいては、「外国語の指導法」と「外国語に関する専門的事項」の開講が求められている。後者の一部として「授業実践に必要な英語力」ならびに「英語に関する背景的な知識」の習得が挙げられている。前者は最低2単位、後者は最低1単位の科目設定になっており、合計最低23回の授業で学ぶ想定である。本学ではいずれも2単位科目とし、合計30回の授業としているが、実のところ、内容の多さ、授業開始時点における英語力の差の大きさに加えて、移行期間と新課程における教材の連携における指導上の理解も必要である。授業実践に必要な英語力は知識だけで身に着く内容ではないため、授業回数は絶対的に不足しているのが現状である。西崎（2017）において、授業時間不足を補うために「小学校英語」「小学校英語教育法」以外の、数少ない英語科目をどのように利用しているかについて述べたが、それに加えて更なる指導の工夫が必要である。

3.2 体験からの体得

では、どのように練習し、体得したらよいだろうか。「クラスルーム・イングリッシュ」については、日頃から「小学校英語」「小学校英語教育法」の授業で、授業者が積極的に英語を使用することにより、学生が英語で行なわれる授業の体験を積み重ねておくことが重要である。よく使われる表現については、授業中に授業者だけではなく学生にも模擬授業内で使わせることで、場面に即した表現が体得されていくことが期待できる。ある程度経験が積み重なった上で、再度この資料にある表現を確認していくことで、着実な習得が可能になるだろう。

よく言われていることだが、クラスルーム・イングリッシュの中でも、ガイドブックの中の「12. ほめる」「13. 励ます」等の表現で、短いものから多用し、気軽に使えるようにしていくことが負担も少なく、自然に体得できる。児童への負担も少ない。

3.3 指導力に加えて英語力の向上をめざす授業

英語力向上に割ける時間は、教職課程においても、現職教員への研修においても不足している。英語に限らず、語学力向上には地道でコツコツ時間をかけて学ぶことが求められるが、授業や研修の内容が、実際に使っている教材から離れていると受講生（または受講者）が感じる場合は、即効性がないと思われることも多く、その結果身が入らず、今日の授業や研修は意味がなかったという感想で終わってしまうことになりかねない。

ためになると実感される授業や研修の条件として、これまでの経験から次のように考えられる。

1. 教材に直接関連した内容を扱う。
2. 自分の授業でもやってみようと思える実践を、模擬授業的に提示する。
3. 教材の楽しく発展的な使い方を提示する。
4. 教材研究を更に深め、扱われている分野の英語を含む知識を広げる。

この4点の中で、1～3については既に多くの授業や研修で行なわれている内容であるが、4については、あまり行われていないと思われる。本稿で強調したいのは、この4番目の活用である。

4. 『Brown Bear, Brown Bear, What do you see?』からの実践的発展的学び

英語絵本の利用については、コア・カリキュラムの「英語に関する背景的知識」の中でも必要な知識として挙げられている。今回は、代表的な絵本である『Brown Bear, Brown Bear, What do you see?』を使った実践的で発展的な学びを紹介する。絵本を使用する場合は、読み聞かせとしての利用が最も多い。どのように利用するかは、絵本によっても児童や授業の実態に合わせて、指導者がよいと思う方法で工夫すればよい。

今回は、西崎ゼミ3年生の6名で行なった実践例を紹介する。まず、絵本に即して登場人物（動物）を演じ、次に好きな動物で演じて、考察を行った。その後、動物が主人公となっている別の英語絵本や英語の歌へ発展させ、知りたい英語を自分たちで英語で調べるといった発展的学びへつながっていった。その経緯と、学生たちが授業をする上での気づきについて述べる。

(1) 『Brown Bear, Brown Bear, What do you see?』

- ① 一人ひとりが絵本のままの登場人物（動物）になり、絵本のおりに演じる。
具体的には、一人ひとりが絵本から作成した絵カードを持ち、なり切って演じる。
- ② 一人ひとりがなりたい動物になり、絵本と同じストーリーで演じる。
白い絵カードになりたい動物をカラーで描き、①と同様に演じる。
- ③ ①と②を動画で撮影し、確認して改良すべき点を話し合う。

(2) 『Bark, George』

- ④ 動物つながりで紹介し、小道具（ゴム手袋）を使用して読み聞かせをする。

途中で、知っている動物の鳴き声を尋ねながら読み進み、オノマトペを確認する。

(3) 『Old McDonald Had a Farm』

- ⑤ オノマトペつながりで英語の歌をDVDまたはYou Tubeで観る。

④と同様、途中で鳴き声を確認しながら聴く。④と重複しているものと重複していない鳴き声がある。2回目以降は、聞く前に鳴き声を言ってみる。

(4) 『Dear Zoo』

- ⑥ 動物を表す形容詞や動物が入っている檻や容器等から、動物名を想像させながら読み聞かせをする。

- ⑦ ②と同様に、登場させたい動物を檻等に入れた絵を描き、順にオリジナルの絵本のようにつないで発表する。

(5) ①～⑦に登場した動物の中で、英語で疑問があれば出し合う。

今回の実践では、「ラクダのこぶ」について何とのか調べたいという学生がいた。

- (6) 登場した動物、自分が絵を描いた動物の中から一人一動物を選び、英英辞典で英語での表現を調べて書き留める。

camelの例：“A camel is a large animal. It has long legs and a long neck. It also has one or two humps on its back. Camel can carry people and things across the desert.”

- (7) 英語辞典からの表現を使って、それぞれがスリーヒントゲームを考えて、問題を出し合う。

学生たちは、①が思っていたよりも難しかったようだ。2, 3回練習したが、わからない表現は学生同士で教え合っただけでいった。②では、動物や色の重複が多くなってしまい、「こんなはずではなかった」「同じ動物ばかりになった可能性もある」と児童の行動を予め想定しておく大切さに気付くことができた。「偏らない結果を求めるためには、どうやってコントロールすればよいのか」、また、「好きな動物を表現させているのだから、偏ってもよいのではないのか」、「偏ってしまった結果困るのはあくまでも指導者の都合ではないのか」等の意見が出された。授業では目標をどこに置き、何を優先させて活動するのかを検討する必要があるとの気づきもあった。

動物の鳴き声については、想像の範囲内のものと、私たち日本人にはそうは聞こえないもの等色々な感想があった。オノマトペについては国語と関連させた学びにも導くことができることを伝えた。

英英辞典での調べ学習については、ほとんどの学生が初めて英英辞典を使用した。そこに書かれている英語は、思っていたよりわかりやすかったとの感想だった。First Dictionaryであるため、たいへん平易なレベルの英語での表記であるが、学生たちのスタートとしては、適当なレベ

ルであった。他にも、英語の言い換えがわかる、言い換えると英語が以外に簡単に思える、英語がよりわかる気分になれるし、英語の力が付いた気になれる、英語で言えるから人に説明しようという気になれる、という感想があった。これらの反応から、スリーヒントゲームを作る、好きな動物について英語で説明する、英語のクロスワードパズルで英語の簡単な言い換えの知識を増やしていくという今後の身近な発展的学習が見えてきた。英英辞典の活用は、言えない表現をどのように易しい英語に置き換えて表現したらよいかの参考になり、話をつないでいくための基礎的英語力の養成にもなるだろう。さらに進めば、次期学習指導要領で必要とされている、Small Talkへのハードルを下げる効果も期待できる。

5. スマートフォンやタブレットの利用

5.1 「アースボール」(地球儀)からの発展例

色や形等基本的な単語を学んだ後、どのように発展させていくかは授業者のアイデア次第である。例えば、色と形から国旗を表現したり、クイズにしたりできる。今回、ゼミでは、面白グッズとして、「ほぼ日のアースボール」で遊んでみた。地球儀のようなビーチボールといえるこのボールには、最新の人工衛星のデータをはじめ、独自のアイコンが散りばめられており、専用のアプリをインストールしたスマホやタブレットをかざすことで、国旗はもちろんのこと、写真や動画、様々なコンテンツを画面で見ることができる。

ゼミでは、世界の国旗というアプリを使って、色やデザインから感じとった国旗の特徴を言い合った。



図 1



図 2

学生の感想には、中東の国旗の色が似ている、アフリカの国旗は緑と黄色が多いというようなものがあり、国旗の色の意味を調べることになった。汎スラブ色、汎アフリカ色、汎アラブ色というものがあることもわかった。国旗の色や描かれている紋章等の意味など、それぞれの国に思いを馳せながら、英語で表現したり、社会科と関連させる方法を考える機会となった。

5.2 Voice Tra

国の情報通信研究機構が開発中のVoice Traについて、ゼミではその活用法を検討中である。よく似たアプリやソフトは色々と存在するが、Voice Traは、31か国語で表現することができ、使い方も簡単で無料で誰でも使用できる。指導者として検索しておきたい外国語を音声と文字の両方で確かめることもでき、大変便利なツールとして利用できる。

6. おわりに

ひと昔前に比べ、英語の教材となりうる情報があふれる世の中になった。学生たちの主体性を重んじ、互いに対話をしながら、時にはどこへ行きつくかわからないことにも挑戦し、その過程での気づきや学びから、広い教養や世の中への理解を深めていく授業が西崎ゼミの理想でもある。

短期間で習得できる授業力に加えて、興味を持って色々なことを面白がりながら、英語力や発想力を養う中で授業力を熟成していくことを望みたい。英語の4技能と英語で授業実践ができる本当の実力は一朝一夕には身につかないが、遠回りに思える多方面からの学びこそ必要であるといえる。出発点は、身近な教材からがよい。そこから掘り下げて学ぶことによって、その教材に対する理解が定着し、自信をもって指導できる土台を作ることにより、授業力に必要な発想力の養成にも役立つことになる。

《引用文献・参考文献》

文部科学省 (2015) 「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm (検索日 20181005)

ほぼ日のアースボール 公式サイト <https://earthball.1101.com/#about>

『American Heritage First Dictionary』, Houghton Mifflin Harcourt Publishing Company, 2010

受理日 平成30年10月5日